

the LEGENDS

人生をかけて、異国の地・日本に來られた歴代の宣教師～レジェンド：立役者～。
その命がけの情熱によって、キリストと出會える恵みに預かっている現代の私達。

今回、日本で最も過疎化の進む地のひとつ・高知県西部幡多郡で日本人になりきって生活し、伝道を担って下さった〈ダネル・ベンダ・マクレン師〉をご紹介します。常に日本宣教を想い、高知～東北～北陸へと幾つも教会を生み出し、その後を日本人伝道者に委ねて…と、伝道を展開されたご夫妻です。

特集

ダネル&ベンダ・マクレン師

『マクレン宣教師との思い出』

北九州シオン教会・引退伝道者：カ丸 嗣夫師



福音の届いていない地での開拓

私が神学校を卒業して、母教会(父・カ丸博の開拓した北九州シオン教会)に赴任して間もなく、病を患い、ほぼ半年床に伏せる毎日を過ごしました。最早この地での働きには向かない…と父の判断で、私はダネル・マクレン宣教師御一家が、日本で最も過疎で福音の届いていない地方の一つ、高知県西部幡多郡(3市10町村)に移り住んで、伝道を開始したばかりで、日本人の働きを求めておられる中村市(現在の四万十市：以降、旧中村市)の開拓に遣わされました。

着いたその日から、免許取り立てで、路上運転が初めての私に「さあ、今日は私たちの伝道圏の幡多郡全域(3市10町村)を視察に行こう！運転はカ丸先生がしなさい。」なんと恐ろしい！私は路上運転が初めてなので…と弁明しましたが、「主が守ってくださるから、ここから始めなさい！」…大変な外人についたものだ！！と思いました。

限界集落に分け入って

出会いの最初から、日本人伝道者に絶対の信頼を置いて、私を前面に押し出しての働きが始まりました。マクレン師は「珍しい外人が来た！と人寄せであなたの働きを助けるのです。」これが、日本一過疎の地域を調べ挙げて選定した伝道地でした。

高知県西部のこの地域には、当時、おそらく西欧人は一人もいなかったと思います。車で限界集落に入り、車を草むらに置いて、丘陵地帯を二手に分かれて、戸別に文書を配布し福音を伝えお話をする。

朝8時に家を出て、帰り着くのは夕方6時頃。今日は2人別々に回って合計18軒、という時もあった過疎です。教会に人々が来ることはできないから、一度の訪問伝道でそのままイエス様を信じて、毎朝晩にイエス様に祈る日々を過ごすこと、そのような導きを積み重ねました。

実はこの地方は、仏教や神社神道の習慣や風俗、葬儀、結婚式の窓口で、彼らの信仰は天地宇宙をお創りになった神への崇敬を心の奥に持つ自然信仰だったのです。それだけに、天地創造の唯一の神を現実にもいますお方として示すことと、罪や汚れを洗い聖くして下さるお方《イエス・キリスト》を示すことは、受け入れられやすい状況でした。その様な中から、いつしか部落集会在不定期に開かれるようになりました。

ある時、町から旧中村市の最も深部まで行こうとある部落(大用/オオユウ)を通過していると、段々畑の奥から「主にすぎる我に悩みはなし」と、高原の涼しい風に乗って、讚美歌が聞こえてきて思わず車を止めて、鍬や鎌を手にする方達に手を振りました。大用集会のメンバーでした。

このように、マクレン先生の存在は、いち早く、高知県西部地区(高知県の3分の一を占める)で、知らない人のない存在となり、マクレンご一家、可愛い3人の娘さんと、いつもにこやかで美しいベンダ夫人は地域の宝となりました。



左写真：マクレン師とベンダ夫人 ▶

右写真：左からマクレン師、夫人、3人の娘さん ▶



【ダネル&ベンダ・マクレン宣教師】

出身国：アメリカ

日本での宣教活動：1954年～1992年

【マクレン師ご夫妻による開拓】

1965年～ 中村福音キリスト教会 伝道開始。力丸師へ

1966年～ 土佐清水伝道所（のち、土佐清水キリスト伝道所）伝道開始

1968年～ 須崎福音キリスト伝道所 伝道開始

1972年～ 山形神召キリスト教会 伝道開始

その後、東北諸教会の働きを応援

【参考文献】 日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（1999）『みことばに立ち、御霊に導かれて～教団創立50周年誌～』、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団・教団史編纂委員会、ペーテルフォト印刷株式会社。



マクレン師ご家族

土佐清水～下ノ加江～須崎～東北へと

私が結婚して、新たに中村に赴任して間もなく、マクレンご一家は中村に来られました。一年も経たないで、次の伝道地・土佐清水市に居を移されて、そこで新しく開拓を始められたのです。その一年後、伝道者が派遣されると、すぐにその方に全てを委ねて、下ノ加江という純農村の空き農家を借りて、家についている畑を家族で耕し、自ら下肥を汲んで、野菜の栽培を農家の方に教えていただきながら、土地と人々の心を耕しては、実りを刈り取っておられました。

土佐清水・中村の働きが順調に進んでいるのを見計らって、下ノ加江から高知に近い須崎市へと伝道の拠点を移され、休む間もなく、高知県西半分に3つの教会の土台を築かれたのです。いつも穏やかで、よく祈り、伝道のこと以外に話題を提起することもなく、私の伝道者生涯に、強固な土台を築いていただいたことを忘れられません。

高知県の働きを委ねると、次のターゲットは東北でした。東北でもいくつもの教会を生み出し、更に次の展開は北陸…日本の伝道者が走って追いかけていけばついていけない勢いで、働きは次々と展開、北陸でも幾つもの教会が生まれました。

引退後もなお輝く、宣教の足跡

日本を離れ帰国された先生を二度尋ねましたが、日本の教会、特に四国、東北、北陸の様子を聞かれ、共に祈りました。そんな時のご夫妻からの目は輝いて、乗り出すようにして耳を傾けておられました。宣教師としての現地での働きは、制度上、引退されていましたが、折に触れて、かつて鋤を入れた地域へ太平洋を越えて訪問され、伝道者を励まし、信徒や地域のつながりを確認するように、旧交を温めては帰国されていました。

1985年から、私は毎年、台湾の原住民伝道で山岳地の教会を巡回しましたが、

まだ当時は車で入れる所は限定され、基本的には殆ど徒歩で奥地まで踏み分けるような働きでした。ところが、奥地に入っていくと、そこにはマクレン宣教師が伝道巡回に入っておられる地区でした。私がマクレン師と共に働いていたことを知ると、先住民の方は驚き、私に対する対応が驚くほど丁寧になったのでした。この地でも、マクレン宣教師の働きは、原住民が普段使っている寝床を空けてくれるままに、その夜具にくるまり、現地の食べ物（犬・猿・蛇・山の果実・台中で売られている魚の刺身等）を喜んで食し、現地の人と全く同じ生活をしながらの巡回でしたから、尊敬されていました。

当時、原住民のために来られていた宣教師は他にもいましたが、誰一人、原住民の家には泊まることなく、日帰りできる所ばかりで、食事は缶詰を持参し、現地のもは何一つ口にしないと、人々は悲しんでいました。マクレン宣教師は日本語ができるので、直接コミュニケーションができ（当時、40代以上の殆どの方は日本語ができた）、福音は直に伝えられていたのです。

マクレン師のお子様である、サッチャン：メアリー、ルッチャン：ルツ、ノニ：ナオミ、私たち夫婦がそのように呼んでいた三人娘。午前は地元の小学校に通い、午後はベンダ先生が教師となって米国のカリキュラムに沿った教育をしていました。沢山のお友達ができるので、溢れるほどの子ども達が教会学校に集まっていました。

今はそれぞれ、海外宣教、教会奉仕者として、ご両親の信仰を受け継いで、しっかりと主の証人として主に仕えておられます。私の伝道者生涯はマクレン師ご夫妻に負うところが大きいと感じています。

お詫び：前4月号の記事にて誤りがありましたのでお詫び申し上げます。訂正版を教団ホームページに掲載しております。

- p.3 左側下から2行目～「1953年、100坪の土地に上高田教会が」
：誤「上高田教会」→ 正「高円寺教会」
- p.3 上段・マリア宣教師の略歴。「1954年山脇師就任と共に～」
：以下の文を追加「『志村キリスト教会』の会堂を建設。」

